



日本文化開放の夜明け前

にほんぶんか かいほう よあまえ

沢 知恵
さわ ともえ

「韓国では日本語でうたっちゃいけないの？」

わかっていたら、大胆にもライブをしたかどうか。

96年に初めて韓国でライブをすることになり、私はあわてました。私の半分の国であり、2歳から6歳まで暮らした韓国でうたってみたい。それがしだいに、大ごとになっていったのです。

日本人によるライブそのものも前例がないから政府への申請が必要だわ、日本語でうたえないわで大騒ぎ。すでにポスターも刷り上げ、今さら後には引けなくなり、半べそをかきながら考えました。とりあえず元々日本語で作詞、作曲したうたを韓国語に訳してみよう、と。

詞や詩の翻訳は、味が落ちることを覚悟の上でやらなければなりません。まったく期待しないで、いやいや始めました。ところが不思議なことに、私のつくったうたは、韓国語に翻訳しても味が落ちないんです。本人が言うとうとうも嘘っぱいですね。でも韓国人がみなくちをそろえて、「そのうたはもともと韓国語でつくったんでしょ」と言うのです。信じられない人は、私のCDをきいてみてください。本当なんです。

つまり、私が鼻唄のようにして体の中から紡ぎだ

すメロディーは、無意識のうちに、結果として日本語と韓国語のどちらでも大丈夫なようになっていったのです。気がついたときには感激しました。ソウルでの初ライブで、私は堂々と韓国語と英語だけでうたい、観客と直接コミュニケーションをとることができました。それはそれはあたたかい「場」でした。

それから年に数回、韓国でライブを重ねるうちに、日本と韓国の関係が急速によくなり、日本文化の開放が、段階的にはありますが行われています。近い将来、韓国のCD店に日本語のCDが並び、全国ツアーの延長で釜山やソウルで公演する歌手も増えることでしょう。

ところで、この数年の日本文化開放過渡期に、日本語でうたうことができないことで四苦八苦したわけですが、私はそのことにむしろ感謝しています。もし日本語禁止という条件がなければ、私はあれほどまでに韓国語と向かい合うことはなかったでしょう。おかげで韓国語が以前よりずっとうまくなったばかりか、ことばに対する意識が鋭くなり、表現とイデオロギーについて考えるようにもなりました。

文化的なことはあせらず、ゆっくりと変わってゆく方がよいのではないのでしょうか。何もかもが経済でくられて急かされる世の中であって、立ち止まってかみしめるゆとりの大切さを思わされます。(歌手)